

オーストラリア英語における音位転換

——ask と aks を事例として——

水 澤 祐美子

1. はじめに

音位転換 (metathesis) は、ある単語の音の一部が入れ替わる言語現象のことである。音位転移や音位転倒と呼ばれることもあり、数多くの言語に認められる現象である。日本語にも音位転換は認められる。例えば、「雰囲気」は、辞書には「ふんいき」と記載されているが、「ふいんき」と発音されることも多い。コンピュータ上、平仮名で「ふいんき」と入力し変換すると「雰囲気」という漢字が選択肢に出てくるほど、「ふいんき」は一般的になりつつある。一方、音位転換により、本来の発音に成り代わった例がある。「山茶花」は「さざんか」と辞書に記載されているが、古くは「さんざか」であり、「新し(あたらし)」は「あたらし」であった(金田一, 2004)。コンピュータ上で「さんざか」や「あたらし」と入力しても「山茶花」や「新し」に変換されることはなく、以前の読み方は廃れ、音位転換した方の語形が正しいとされている。

同様に、英語においても音位転換の例が存在する。英語の子音に関する音位転換の一例は、流音 (liquid) *r* である (Wójcik, 2012)。鳥を意味する *bird* は、ゲルマン祖語¹⁾ (Proto-Germanic) において *brid* であったが、古英語の時代になると *brid* が *bird* に取って代わられるようになり、近代英語 (ModE) では *bird* と発音されスペリングが定着した (Welna, 2002)。

本稿では、社会言語学の分野において、アフリカ系アメリカ人の英語 (African American Vernacular English; AAVE) の特徴とされている *ask* を *aks* と発音する音位転換が、現代オーストラリア英語においても一部の話者により使用されることを提示し、*aks* の歴史的背景と、英語の変

種を参照しながら、オーストラリア英語において音位転換が起きている理由を明らかにすることを試みる。

2. アフリカ系アメリカ人の英語における aks の事例

社会言語学の分野では、ask が aks と発音されることは、AAVE の特徴のひとつであるとされている (Labov, 1972, Wolfman, 2003 etc.)。「先住民や移民といった少数派は、言語差別 (linguicism)²⁾ の犠牲者となってきた」(Philipson, 1988, p. 352) ように、AAVE 使用者もその例外ではなかった。AAVE は文法や発音等において標準英語とは異なり、言語差別の対象となっていたこともある。事実、アフリカ系アメリカ人の言語学者であるマクウォーター (John McWhorter) によれば、aks は教育を受けていない人たちによって使用されていたし、いまま aks の使用が無知の象徴と思われることもある (McWhorter, 2014)。

このように aks の使用は、その使用者の人種や無学さを暗示すると考えられていた。ラボフ (William Labov) は、1960 年代半ば、ニューヨークのハーレムで実証研究を行い、それまで規則性のない取るに足りないことばとみなされていた AAVE の規則性を示し、AAVE は英語の変種 (variety) であることを明らかにした (Labov, 1966, 1972)。

3. 動詞 ask の音位転換 aks の歴史的背景

AAVE の特徴のひとつであるとされている ask の音位転換である aks は、アメリカ大陸での言語現象に限らない。歴史を遡ると、グレートブリテン島で、動詞 aks は古英語 (Old English; 450 ~ 1100) の時代から使用されていたことが明らかになっている。以下に古英語の時代から実際に使用されていた用例を参照する。

3. 1 古英語の時代

古英語 (Old English; 450 ~ 1100) の時代、動詞 ask は、当時、æsce や acsian 等のスペリングで使用されていた。当時は、スペリングが統一されておらず、上述の 2 例以外にも多くの異形 (variant) が確認される。Oxford English Dictionary (OED) によると、acsian が ask の異形

のひとつとして記載されており、一例を以下に示す。

“to ðam þæt he wile secan and **acsian** þa befæstan gestreonu.”

Genesis A (Brock, 1931)

このように、古英語の時代から、音位転換は存在していたことが明らかになっている (Keyser, 1975)。

3. 2 中期英語の時代

中期英語 (Middle English: 1100 ~ 1500) の時代に、動詞 aks は axe として作品に使用されていた。Johns Hopkins Sheridan Libraries が提供する *Glossarial Concordance to Middle English: The Works of Geoffrey Chaucer and the English Works of John Gower* から用例を析出したところ、axe の使用例は 94 例確認できた。イギリス文学の伝統を形成する最初の重要作家であるチョーサー (Geoffrey Chaucer; ?1340 ~ 1400) の代表作である『カンタベリー物語 (*The Canterbury Tales*)』(松田, 2019) に axe が使用されている。その一例を表 1 に示す。

表 1 *The Canterbury Tales* における axe の一例

原文	Yow lovers axe I now this questioun;
日本語	1) さて、恋をしておいであなた方におたずねします (繁尾訳, p. 44) 2) さて、恋をしているそなたらに この質問をしてみよう (笹本訳, p. 28)

(line 1347 in *Knight's Tale, The Canterbury Tales*)

『カンタベリー物語』を含むチョーサーの作品において、動詞 axe の用例は、全 50 例が確認された。

中期英語における axe の用例はチョーサーだけに限らず、同世代に活躍したガウワー (John Gower; ?1330 ~ 1408) による作品『恋する男の告解 (*The Lover's Confession*; 原題 *Confessio Amantis*)』³⁾ にも 44 例の axe が確認された。表 2 に一例を示す。

表2 *The Lover's Confession* における axe の一例

原文	And for this cause I axe that;
日本語	それでは こうなったわけを おたずねしよう (伊藤訳, p. 100)

(line 1644 in *The Lover's Confession*)

中期英語となり、スペリングが axe へと変わっているが、axe の使用はイギリス文学史でも重要とされる作品に書きことばで使用されていた。次項において、近代英語における使用例を参照する。

3. 3 近代英語の時代

近代英語 (Modern English: 1500 ~ 1900 頃) の時代にも axe が使用されていた。近代英語初期、英語に翻訳された最初の聖書といわれているカヴァーデール聖書 (*The Coverdale Bible*, 1535) のマタイによる福音書 (Matthews) には、axe が5例認められる。用例の析出には、*Textus Receptus Bibles* を使用した。*Textus Receptus Bibles* では、オンライン上で英語版やギリシャ語版の過去に出版された聖書などが参照できるウェブサイトである。表3に axe を含むテキストとその現代語訳を示す。

表3 カヴァーデール聖書のマタイによる福音書7章における axe の例

原文 (7 節)	Axe , and it shalbe geuen you;
日本語訳	求めよ、そうすれば、与えられるであろう。
原文 (8 節)	For whosoeuer axeth , receaueth; and he that seketh,
日本語訳	すべて求める者は得、探すものは見出し、
原文 (9 節)	Ys there eny man amonge you, which yf his sonne axed hym bred, wolde offer him a stone?
日本語訳	あなた方のうちで、自分の子がパンを求めるのに、石を与える者があるうか。
原文 (10 節)	Or yf he axed fysshe, wolde he proffer hym a serpernt?
日本語訳	魚を求めるのに、へびを与える者があるうか。

(マタイによる福音書 in *The Coverdale Bible*)

以上、確認したように、英語の時代区分である古英語、中期英語、近代英語において、グレートブリテン島での *axe* (*aks*) の使用が認められた。次節では、現代英語の用例を収集するコーパス上で確認された *aks* を参照する。

4. コーパスに見られるアメリカ英語とイギリス英語における *aks* の使用例

近年、各国で大規模コーパスの構築が進められている。前述のように言語差別の対象となることのある *aks* であるが、実際に使用されている用例をアメリカ英語、イギリス英語において確認する。なお、オーストラリア英語のコーパスは、オーストラリア英語の節で詳述する。

4.1 現代アメリカ英語コーパス

現代アメリカ英語コーパス (The Corpus of Contemporary American English: COCA) には、現代のアメリカ (1990-2019) で使用された 10 億語のデータが含まれている。COCA に含まれているジャンルは、話しことば、小説、雑誌、新聞、学術的テキスト、テレビ、映画、ブログ、ウェブサイトである。COCA で *aks* の用例を検索したところ、175 例が析出された。ここから、固有名詞や頭文字語を削除したところ、動詞 *aks* は 61 例であった。これらの用例は、ウェブサイト、映画、雑誌に多くみられ、ニュースや学術的なテキストにおいては少なかった。表 4 にジャンルごとの *aks* 表出例をまとめる。

表 4 COCA における *aks* のジャンル別用例数⁴⁾

ジャンル	ACAD	MAG	NEWS	SPOK	FIC	TV	MOV	BLOG	WEB
用例数	1	1	1	1	2	3	7	8	37

ACAD のジャンルに表出した 1 例を確認したところ、アフリカ系アメリカ人の発話に関する研究であり、実際に、アフリカ系アメリカ人の発話内容 “So I went and *aks* her about talking to a potential partner,” を書き写した箇所であった。FIC の 2 例は、小説 *A Daughter's House* 内

“Aks me, aks me”の発話であった。この発話において発話者の人種は明らかでないが、書きことばにおいて aks の使用は少ないことがわかる。

書きことばとはいえ、ブログやウェブサイトでの表出が多い理由は、推敲する可能性が学術誌や小説と比較して格段に低く、すぐに投稿できるという点において、書きことばであるもの話しことばに近いだろう(水澤, 2024a)。その他にも、テレビ番組や映画での使用が多くみられる。以上のことからわかるように、現代アメリカ英語において、aks の使用は比較的話しことばにおける使用が多い。

COCAにおいて年代別では、データが収集された30年のうち、18年分⁵⁾に aks は析出されず、析出された年においても使用例は少ない。

表5 COCAにおける aks の年代別用例数

年代	90	93	97	99	01	04	09	12	13	15	17	19
用例数	2	1	1	3	1	1	1	45	1	1	3	1

(西暦は便宜上、最初の2桁をのぞいて記載)

一番多かった年は2012年の45例であるが、ひとつのウェブサイトでも33例が使用されているため、格段に多いとはいいい切れないうだろう。

4.2 イギリス英語コーパス

イギリス英語コーパス (The British National Corpus; BNC) は、現代のイギリスで使用されている1億語からなる大規模コーパスである。BNCに含まれているジャンルは話しことば、小説、雑誌、新聞、学術誌である。COCAと同様に、BNCで aks の用例を検索したところ、1例のみが析出された。*London Jamaican: Language systems in interaction* (Sebba, 1993) という学術書で、ジャマイカ人の両親をもつロンドン生まれの17歳の女性による発話 “cause I’m born English so they aks me what I want to speak Patois for?” である。両親がジャマイカからの移民ということで、発話者は、英語を母語とするもののジャマイカクレオールを流暢に話す10代の女性であった。アメリカでの aks の使用と比較し、BNCでの aks の用例は格段に少ない。

5. オーストラリア英語

近代国家としては新しいとみなされるオーストラリアだが、ヨーロッパ人が入植するはるか以前から、オーストラリア大陸には多くの人々が暮らしていた。先住民の祖先がオーストラリア大陸に到達したのは、4万～6万年前のことであるといわれている (Broome, 2010)。その後、ヨーロッパから入植者たちがオーストラリアに到着した当時、オーストラリア大陸には約 600 の氏族集団が存在したといわれている (Commonwealth of Australia, 2015)。当時の人口を正確に推定することはできないが、オーストラリアには約 30 万人の先住民がいたという研究者もいれば (Radcliffe-Brown, 1931)、約 100 万人と推定する研究者 (Butlin, 1983) もいる。

オーストラリア大陸にイギリス人が上陸したのは 1770 年のことで、1788 年にイギリスから移住者や流刑地として多くの犯罪者を乗せた 11 隻の船団 (The First Fleet) がシドニー近郊に上陸し植民地を築いた。その後、1901 年にオーストラリア連邦が成立した。このような歴史的背景から、オーストラリアはイギリスとの繋がりが強い。オーストラリア英語は、18 世紀後半から 19 世紀初頭にかけてのグレートブリテン島、特にロンドンの方言との歴史的な繋がりに加えて、南部イギリス英語の影響 (Cochrane, 1989; Yallop, 2003; Leitner, 2004; Cox & Palethorpe, 2007) や、移民の流入により、アイルランド英語やスコットランド英語の影響を受けてきている (Cochrane, 1989; Burridge, 2010)。

多文化社会を反映し、オーストラリアの家庭では、300 以上の言語が話されているといわれ、オーストラリアにおいて、英語は公用語ではないが、国の言語 (national language) と規定されている (Australia Government, 2023)。半世紀以上の前の研究では、オーストラリア英語の変種は、一般オーストラリア英語 (General Australian English: GAusE)、教養あるオーストラリア英語 (Cultivated Australian English: CAusE)、ブロード・オーストラリア英語 (Broad Australian English: BAusE) の 3 種が存在するとされていた (Mitchell & Delbridge, 1965)。CAusE の話者数は少数派であるが、イギリスの社会方言のひとつで社会階級や学歴の高さを示すといわれる容認発音 (Received

Pronunciation) に似た点が多く、もっとも権威があり、女性話者の割合が高い。一方、BAusE 話者は、訛りが強く、地方の労働者階級の男性の割合が高い。近年になって、多くの移民を受け入れている社会文化的背景を反映し、新たなオーストラリア英語の分類が提案されている (Cox & Palethorpe, 2007)。その分類は、標準オーストラリア英語 (Standard Australian English; SAusE)、先住民の英語 (Aboriginal English)、民族文化的オーストラリア英語 (Ethnocultural Australian English varieties) となっている。現在、話者数では SAusE が大多数を占め、公共放送など幅広く使用されている (Mizusawa, 2017; 水澤, 2024b)。

5. 1 オーストラリア英語における音位転換

本項では、オーストラリア英語コーパスから析出できた aks の使用例に加え、コーパス以外で確認できた 2 名のオーストラリア人の発話における使用例を参照しながら、現代オーストラリア英語における aks の使用に言及する。オーストラリア人 2 名は、両者とも女性で、オーストラリアで生まれ育った。彼女たちによる aks の使用は、話しことばにおけるものであった。

5. 1. 1 オーストラリア英語コーパスにみられる aks の使用例

オーストラリア英語のコーパスは、Language Data Commons of Australia (LDaCA) を参照する。LDaCA は、2023 年半ばに廃止された Australia National Corpus (AusNC) のデータを引き継ぐ形で管理され、8 つのサブコーパスからなる。LDaCA に含まれているサブコーパスは、次に示すように年代やジャンルがさまざまに異なっている。

1. The speech of Australian adolescents: Research data and recordings collected by A. G. Mitchell and Arthur Delbridge in 1959 and 1960
2. A COrpus of Oz Early English (COOEE)
3. Australian Corpus of English (ACE)
4. International Corpus of English
5. Braided Channels

6. AustLit

7. Australian Radio Talkback (ART)

8. The La Trobe Corpus of Spoken Australian English (LTCSAusE)

上述の8サブコーパスの概略を示す。The speech of Australian adolescents は1959年から1960年にかけて収集されたオーストラリア全土330校7,736人の生徒が話したオーストラリア英語が22,187件録音され、COOEEは1788年から1900年までの書きことば1,357件が収集されている。次に、ACEは新聞、ルポタージュ、社説、評論、雑誌、学術雑誌、小説など500のサンプルが収録されている。International Corpus of Englishは、500サンプルのオーストラリア英語（60%が話しことば、40%が書きことば）で構成され、話しことばのデータは、対面・電話での会話、モノログやダイアログなどを含み、書きことばのデータは未発表の手紙（個人的・専門的）、学生のエッセイ、新聞記事、一般的な小説、学術的なテキストなどを含む。Braided Channelsは、オーストラリアの内陸に住む女性へのインタビューなどを含む。AustLitは、1795年から1930年代までに出版され、現在は著作権切れとなった詩、小説、批評のサンプルを含んでいる。ARTは、2004年から2006年までのオーストラリア国内で放送された27ラジオ番組の録音と書き起こしのデータを含む。最後に、LTCSAusEは、オーストラリア人英語話者（フランス語母語話者との対話を含む）による6つの会話の録音と書き起こしを集めたコーパスである。LDaCAでは、以上の8サブコーパスを横断的に検索できる。

LDaCAにてaksの用例は3件、axの用例が6件析出された。後者の用例6件のうち、2件は、名詞の斧と略語であったので、動詞askを意味するaxの用例は4件である。この4件は、いずれもAustLitに収録された書籍、つまり、書きことばであった。出版年は1800年代であり、当時はオーストラリアがイギリスの植民地であった。以下に用例を示す。

Rural and City Life

“I ax pardon for stopping you,”

(Houlding, J. R., 1870)

Convict Once, and Other Poems

“But wich is wich, I’d beg to **ax**?”

(Stephens, J. B., 1888)

The Land of the Hibiscus Blossom: A Yarn of the Papuan Gulf

“Did they ever **ax** me one question as to her age, or state of repair?”

(Nisbet, H., 1888)

Australian Tales

“I **ax** yer pardin forty times, Mr. Hopewell”

(Clarke, M. A. H., 1896)

一方、aks の用例は、ART に収録されており、2005 年 12 月 5 日に放送されたラジオ番組でのパーソナリティーと視聴者との対話内であった。同一の視聴者が、以下の 3 回にわたる発話を行っていた。

Um I just wanted to **aks** Lawyer Bob Lawyer Bob um can a bank open your account I’ve paid off my home loan my mortgage I’ve **aksed** for um to discharge my mortgage ‘n’ that to close the account I’ve paid all the fees ‘n’ everything that they’ve **aksed** for.

5. 1. 2 アイルランド系白人女性の事例

ひとりは、メルボルン郊外に住む 50 代前半の白人女性で、アイルランド系移民の子孫である。本人を含め、彼女の両親もオーストラリアで生まれており、母語は英語である。彼女は、旅行で海外へ行くことはあったが、オーストラリアで教育を受け、高等教育を終えている。

彼女と同世代の女性との日常会話において、aks が使用されていた。筆者が日を改めて彼女に ask を aks と発音する理由について尋ねたところ、彼女から「意識しない会話において、aks と発音することがある」という回答があった。彼女は、aks の発音を否定的に捉えていた。彼女が、書きことばで aks と記すことはない。

5. 1. 3 先住民女性の事例

もうひとりは、ドキュメンタリー映画に出演しているオーストラリア先住民女性である。彼女による aks の使用例は、ドキュメンタリー映画

である *The Last Daughter* 内の語りの部分で確認され、この映画の共同監督を務めたウイラジュリ族 (Wiradjuri)⁶⁾ の女性マシューズ (Brenda Matthews) が使用していた。映画は 2023 年 6 月にオーストラリア全土で放映され、マシューズは、もうひとりの監督であるシュミット (Nathaniel Schmidt) とともにこのドキュメンタリー映画でアデレード映画祭観客ドキュメンタリー賞を受賞した (Korff, 2023)。

このドキュメンタリー映画の概要は以下である。1973 年、マシューズが 2 歳のとき、先住民の両親から白人家族のもとに養子に出された。彼女の白人家族はマシューズが養子に出されたと聞かされていたが、実際には当時のオーストラリア政府の方針により先住民の両親から強制的に離別させられていた。マシューズを含む 7 人の子どもたちと引き離された先住民の両親は、子どもたちを取り戻すため政府と戦い、その後、マシューズが 8 歳のとき、彼女を取り戻した。彼女の最初の記憶は、白人家族とのものであった。幼い頃、白人の家族と過ごした生活と先住民の生活という狭間に陥り、アイデンティティ・クライシスに悩む彼女は、白人の両親、特に自分と同じ年頃の白人の妹のことを懐かしく思い出し、先住民の両親から引き離された真実を探すため、残された書類や、当時関わった人たちの証言をもとに、里親となった白人家族を探す旅に出る。その過程で、彼女は、長い間、闇に葬られていた真実を明らかにし、自分の過去に経験した痛みを癒しながら、彼女が育った先住民の家庭と幼



図 1 マシューズと白人家族の妹 (Matthews, n.d.)

少期（2～8歳まで）に育てられた里親である白人家庭とを和解させる（Matthews, n.d.）。図1に、里親となった白人家族の妹とマシューズの写真を示す。

ドキュメンタリー映画内での主人公の語りにおいて、aksの用例が、少なくとも2回確認された。表6に映画内で表出した時間と発話箇所を示す。

表6 *The Last Daughter* 内での時間と発話内容

時間	発話
49.01	So I aksed them to look at the birth date on the notice,
1.25.43	I couldn't aks for anything more...

ただし、いずれの場合も英語字幕にはaskと記載されていた。

このドキュメンタリー映画の放映と同時に、同じタイトルの書籍 *The Last Daughter* (Matthews, 2023) が出版された。書きことばである書籍には、主人公マシューズの発話を含め122のaskの記載があるが、aksの用例はみられない。

6. 考察

本稿で確認したオーストラリア英語におけるaksの使用例は、書きことばと話しことばの両方に確認された。ただ、書きことばの使用例は、植民地時代の書籍であり、オーストラリア英語が確立する以前のものであった。その当時の著者といえば、かなりの知的階級に属した者であっただろう。一方、現代オーストラリア英語において、オーストラリアで生まれ育った2名の女性と、ラジオ番組に参加するだけの英語力をもった男性によるaksの使用が認められた。3名のオーストラリア人によるaksの使用例は、いずれも話しことばであった。フォーマリティの違いはあるものの、話しことばの特徴として、書きことばに比べ、意識の度合いの違いを挙げることができる（水澤, 2024a）。「言語行為は無意識下にある」とラボフ（Labov, 2006, p. 324）が述べるように、とくに白人女性は同年代の親戚という話し相手と、特別な注意を払うことがない会話で、aksを使用していた。先住民女性はドキュメンタリー映画上の

語りで aks を使用していた。

白人オーストラリア女性は、「aks は、意識しない話しことばで使用する」と述べているように、意識の度合いが高い話しことばや書きことばでは、aks を使用しない。同一の人物であっても、意識の度合いにより異なる語形を使用することは、先駆的な社会言語学者のひとりであるトラッドギル (Peter Trudgill, 1974) が指摘するところである。トラッドギルは、上流会級に属する人でも、書きことばと話しことば、さらに、かしまった状況か寛いだ状況かの違いにより、ことば遣いが異なると述べている (Trudgill, 1974)。

話しことば、とくに、今回調査の対象とした白人女性は、寛いだ状況の話しことばにおいて、aks を使用していた。また、今回調査の対象とした先住民女性による aks の使用は、ドキュメンタリー映画上の語りの部分での使用であり、定かなことはいえないが、場面から非常に穏やかな雰囲気がかがえる。さらに、コーパスから、ラジオ番組でのパーソナリティと対話する男性視聴者の発話に aks が確認されたが、寛いだ状況での対話であった。彼の人種を特定することは難しいが、白人男性がパーソナリティを務めるラジオ番組に自ら連絡するほどの英語力をもつと推察できる。

現代オーストラリア英語における aks の使用例は、とくに女性 2 名に関して、生育環境や地域、受けた教育、人種も異なるものであった。女性 2 例と男性 1 例のみとはいえ、現代オーストラリア英語において、一部のオーストラリア人による aks の使用が明らかになった。Hume (1997) によると、音位転換の原因に知覚の最適化 (perceptual optimisation) が挙げられる。知覚の最適化とは、たとえば、音声知覚において、もっとも効率の良い形に音声システムが最適化されることである。今回、背景の異なる 3 名が aks を使用していた理由として、知覚の最適化、つまり、今回の調査対象となった話者にとり、標準英語において正しいと考えられる ask よりも aks の方が発音しやすいため起きたと考えられる。

一方、今から 100 年以上前のオーストラリアがイギリスの植民地であった時代の ask に対する ax の使用は、いずれも書きことばで、書籍に使用されているものであった。当時、植民地時代のオーストラリアで書籍を書くほどの知識階級によって ax が使用されていた。著者たちの

出身地は明らかでないが、出身地に ask の変種 ax が使用されていたことが示唆される。

グレートブリテン島で古英語の時代からスペリングは異なるものの aks (ax(e)) が使用されていたことを考慮すると、歴史は古く、言語差別に該当するに当たらないと考えられるが、本研究でインタビューを行った白人女性が「aks を使うことは良くないとされているから、意識しているときは使用しない」と述べるように、いまだに aks の使用に対する否定的な意識は根強く残っていることが明らかになった。

7. おわりに

本稿では、オーストラリア英語における音位転換を aks の使用例から確認した。まず、歴史的背景を概観し、その後、イギリス英語、アメリカ英語、オーストラリア英語のコーパスから現代英語に使用されている aks (ax(e)) を参照した。アメリカ英語での使用例が多く、イギリス英語、オーストラリア英語での使用例は少なかった。オーストラリア英語で aks (ax) が使用されていたが、時代区分が2つに分類される。ひとつは、植民地時代の書籍に散見された書きことば ax の使用であり、もうひとつは、現代オーストラリア英語において、ラジオ番組での男性視聴者の発話、白人女性の会話、先住民女性の語りといった話しことばに使用された aks である。前者において、出身国は定かでないものの、当時の移民が、書籍（かしこまった書きことば）において ax を使用しており、書籍を書くほどの階級でも ax を使用していたことが示唆できるだろう。後者においては、音位転換の原因のひとつである知覚の最適化により生じたと考えられる。管見の限り、オーストラリア英語における ask と aks の音位転換の例は学術的な記述がなく、本稿で参照したオーストラリア英語の ask が aks と発音される3名の事例において、現代に生きるオーストラリア英語話者による aks の使用例が確認できたことは特筆すべきことである。

本稿で参照した aks の用例は、少数例にとどまっている。今後は調査対象を広げ、aks 使用者の性別や年齢、職業の違い、教育や家庭環境等を精査し、オーストラリア英語における aks の使用と歴史的背景について明らかにしていきたい。

謝辞

貴重なコメントをくださいました明治大学名誉教授清水あつ子先生と査読者、編集委員の先生方に、この場を借りて心よりお礼申し上げます。なお、本稿の文責は筆者に帰することを申し添えます。

注

- 1) ゲルマン祖語とは、ゲルマン語派に属する言語（ドイツ語、英語、ノルド語等）の祖先となる言語である。
- 2) 言語差別とは「言語により分けられた集団間の（物質的・非物質的）権力や資源の不平等な分配を正当化し、達成し、再生産するために使用されるイデオロギーと構造と実践」である（Skutnabb-Kangas, 1988, p. 13）
- 3) 『恋する男の告解』は、中期英語で書かれた長編詩で、1390年から1393年にかけて刊行された。
- 4) それぞれの略語は以下である。ACAD（学術誌）、MAG（雑誌）、NEWS（ニュース）、SPOK（会話）、FIC（小説）、TV（テレビ番組）、MOV（映画）、BLOG（ブログ）、WEB（ウェブサイト）。
- 5) 使用例のなかった年は、1991、1992、1994-1996、1998、2000、2002、2003、2005-2008、2010、2011、2014、2016、2018である。
- 6) ウィラジュリ族は、オーストラリアクイーンズランド州からニューサウスウェールズ州にまたがるバンジャラン地方（Bandjalung Country）に住む先住民である。

参考文献

- Australian Bureau of Statistics. (2018). *50th anniversary of the 1967 referendum*. Retrieved from <https://www.abs.gov.au/ausstats/abs%40nsf/mediareleasesbyCatalogue/E31B62F372FC7BCECA2581320029DC01>
- Australian Government. (2023). English—our national language. Retrieved from <https://www.homeaffairs.gov.au/about-us/our-portfolios/social-cohesion/english-our-national-language>
- Broome, R. (2010). *Aboriginal Australians: A history 1788* (4th ed.). Crows Nest: Allen & Unwin.
- Brock, J. C. (1931). *The genesis of creation*. London: Rayner Litho. Co.
- Butlin, G. N. (1983). *Our original aggression: Aboriginal populations of southeastern Australia, 1788-1850*. Sydney: G. Allen & Unwin.
- Burridge, K. (2010). A peculiar language: Linguistic evidence for early Australian English. In R. Hickey (Ed.) *Varieties of English in writing: The written word as linguistic evidence* (pp. 295-348). Amsterdam: John

- Benjamins Publishing Company.
- Clarke, M. (1896). *Australian tales*. Melbourne: A. & W. Bruce Printers.
- Chaucer, G., & Benson, L. D. (1987). *The riverside Chaucer* (3rd ed). Boston: Houghton Mifflin Co.
- チヨースー, ジェフリー (1985) 『カンタベリー物語選』(繁尾久訳). 荒地出版社.
- チヨースー, ジェフリー (2002) 『カンタベリー物語』(笹本長敬訳). 英宝社.
- Cochrane, G. R. (1989). Origins and development of the Australian accent. In P. Collins & D. Blair (Eds.) *Australian English: The language of a new society* (pp. 176-186). Queensland: University of Queensland Press.
- Commonwealth of Australia (2015) Australian story. Retrieved from <http://www.australia.gov.au/about-australia/australian-stories>
- Coverdale, M. (1535). *The Coverdale Bible*.
- Cox, F., & Palethorpe, S. (2007). Australian English. *Journal of the International Phonetic Association*, 37(3), 341-350.
- Gower, J., & Macaulay, G. C. (1900). *The English works of John Gower*. London: Trübner & Co., Ltd.
- ガワー, ジョン (1980) 『恋する男の告解』(伊藤正義訳). 篠崎書林.
- Houlding, J. R. (1870). *Rural and city life; or, the fortunes of the stubble family, by old boomerang*. London: Sampson Low, Son, & Marston.
- Hume, E. (1997). The role of perceptibility in consonant/consonant metathesis. In S. Blake, K. Eun-Sook, & S. Kimary (Eds.) *WCCFL XVII Proceedings* (pp. 293-307). Stanford: CSLI.
- 金田一春彦 (2004) 『金田一春彦著作集 第十一巻』玉川大学出版部.
- Keyser, S. J. (1975). Metathesis and Old English phonology. *Linguistic Inquiry*, 6(3), 377-411.
- Korff, J (2023). *The last daughter*. Retrieved from <https://www.creativespirits.info/resources/movies/the-last-daughter>>, retrieved 4 February 2024
- Labov, W. (1966). *The social stratification of English in New York City*. Washington, D. C.: Center for Applied Linguistics.
- Labov, W. (1972). *Language in the inner city: Studies in the Black English vernacular*. Pennsylvania: University of Pennsylvania Press.
- Labov, W. (2006). *The social stratification of English in New York City* (2nd ed.). Cambridge: Cambridge University Press.
- Leitner, G. (2004). Beyond Mitchell's views on the history of Australian English. *Australian Journal of Linguistics*, 24, 99-125.
- McWhorter, J. (2014). The 'ax' versus 'ask' question. Retrieved from

- <https://www.latimes.com/opinion/la-xpm-2014-jan-19-la-oe-mcwhorter-black-speech-ax-20140119-story.html>
- 松田隆美 (2019) 『チョーサー 『カンタベリー物語』 : ジャンルをめぐる冒険』慶應義塾大学出版会.
- Matthews, B. (2003). *The last daughter*. Melbourne: Text Publishing.
- Matthews, B. (n.d.). *Meet Brenda: Brenda's story*. Retrieved from <https://www.brendamatthews.com.au/index.php/about/>
- Mizusawa, Y. (2017). Australia embracing multicultural society. In Manning, J., Mizusawa, Y., Odagiri, T., & Ohira, M. *Multiculturalism and multicultural society* (pp. 15-35). DTP Publishing.
- 水澤祐美子 (2024a) 「状況にふさわしいことばの使用」川村晶彦編『グローバル社会の 英語コミュニケーション・ハンドブック : 発話行為・ポライトネス表現辞典付』 (pp. 34-52). 三省堂.
- 水澤祐美子 (2024b) 「英語の多様性 : World Englishes」川村晶彦編『グローバル社会の 英語コミュニケーション・ハンドブック : 発話行為・ポライトネス表現辞典付』 (pp. 185-202). 三省堂.
- Mitchell, A. G. & Delbridge, A. (1965). The speech of Australian adolescents: A survey. Angus and Robertson.
- Nisbet, H. (1888). *Land of the hibiscus blossom: A yarn of the Papuan Gulf*. London: Ward and Downey.
- Phillipson, R. (1988). Linguicism: Structures and ideologies in linguistic imperialism. In T. Skutnabb-Kangas & J. Cummins (Eds.), *Minority education: From shame to struggle* (pp. 339-358). Clevedon; Philadelphia: Multilingual Matters LTD.
- Radcliffe-Brown, A. R. (1931). *The Social Organization of Australian Tribes*. Melbourne: Macmillan.
- Sebba, M. (1993). *London Jamaican: Language systems in interaction*. London: Longman Group UK Ltd.
- Skutnabb-Kangas, T. (1988). Multilingualism and the education of minority children. In T. Skutnabb-Kangas & J. Cummins, Jim (Eds). *Minority education: From shame to struggle* (pp. 9-44). Clevedon; Philadelphia: Multilingual Matters Ltd.
- Stephens, J. B. (1888). *Convict once, and other poems*. Sydney: G. Robertson.
- Trudgill, P. (1974). *The social differentiations of English in Norwich*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Wełna, J. (2002). Metathetic and non-metathetic form selection in Middle English. *Studia Anglica Posnaniensia*, 38, 501-513.
- Wójcik, J. (2012). Metathesis in the History of English. *Roczniki zhumanistyczne*,

LX(5), 45-63.

Wolfram, W. (2003). Reexamining the Development of African American English: Evidence from Isolated Communities. *Language*, 79(2), 282-316.

Yallop, C. (2003). A. G. Mitchell and the development of Australian pronunciation. *Australian Journal of Linguistics*, 23, 129-141.